研究論文 自然学校におけるラディカルな社会変革の要因 ーヴァンダナ・シヴァの近代科学批判を手がかりにー

野田 恵
東京農工大学

In the Nature School Movement, a Primary Cause of Radical Social Reform
—Taking a Cue from Vandana Shiva's Criticism of Modern Science—

Megumi NODA
Tokyo University of Agriculture and Technology
(受理日 2014 年 7 月 12 日)

The purpose of this study is to logically clarify radical elements in Nature Schools to further clarify the significance of Nature Schools in building a sustainable society. Nature Schools solve regional social problems using experiencing nature as a tool. However, so far experiencing nature has been thought of as difficult to change social structure.

This paper investigates the relationship between people and nature in Nature Schools, taking a cue from Vandana Shiva's criticism of modern science. As a result, this study showed that the relationship between people and nature constructed by Nature Schools is fundamentally different from the relationship between people and nature in modern times.

That is to say, by experiencing nature, people can build a friendly relationship with nature and experience nature comprehensively. Nature is never decisively destroyed through nature experiencing activities. This kind of alternative relationship between people and nature that is created through experiencing nature is a radical element of Nature Schools. Moreover, the Nature School movement contains the element "sharing and diversity," and this can be valued as a radical element as well.

Key words: Nature School, experiencing nature, Vandana Shiva, radically, relationship with nature

I はじめに

環境教育には「対処療法」ではなく環境問題を生み出す「社会・経済システムを変え」、持続可能な社会を構築する「根本的な問題解決」をもたらすことが期待されている（阿部 2012 2）。自然学校は自然体験活動^①を継続的に実施する環境教育の拠点であるが、近年では地域課題を解決する

担い手としての評価も高まってきている。しかし、自然学校は本当に地域社会を変えるのか。その変化は、環境教育が目指しているラディカルなものなのであろうか。ここでいう「ラディカル」とは、社会に対する批判を伴うような「根本的な」という意味である。

自然学校が社会問題の解決の方法としているのは主に「自然体験活動」であるが、これまでの環

問い合わせ先 nodamatsuko77@yahoo.co.jp

環境教育研究では、自然体験活動や自然体験学習と社会変革の関係について消極的な評価をするものが多かった。それゆえに、自然学校がラディカルな社会変革をもたらすのか疑問が生じる。

本稿では、持続可能な社会の構築における自然学校の意義をより明確にするために、自然学校が持つラディカルな要因を、ヴァンダナ・シヴァの議論を手がかりに理論的に明らかにする。

本稿は以下の順序で論述を行う。まず2節において、問題の所在を明らかにする。3節ではヴァンダナ・シヴァの思想を取り上げる意義を述べた後で、課題を明らかにする観点を彼女の思想から導き出す。そして4節では、3節で得た観点をもとに自然学校に即して考察を行う。最後に5節において、本稿の結論と残された課題について述べる。

II 問題の所在

近年、自然学校は社会問題を解決しESDの担い手になると言われている。例えば、阿部(2012 8-16)は、自然学校が「持続可能な地域づくりの拠点である」という評価をしている。西村(2013)も、自然学校が持続可能な社会に向けた社会問題の解決と新しい価値の創造というソーシャルイノベーションを創出していることを明らかにしている。

全国に展開されている自然学校の取り組みは非常に多彩であるが「自然学校のソーシャルイノベーションの『ツール』は共通して『自然体験活動』である」(西村 2013 140)。つまり、自然学校は「自然体験活動」を社会問題の解決の方法としている点に共通した特徴がある。

しかしこれまでは、自然体験学習や自然体験活動を中心とした環境教育は社会変革をもたらさない、と評されてきた。

例えば、新田(2003)は、90年代の環境教育について、自然体験学習がその主流となったが、それによって「教育内容が＜脱環境問題化＞している」ことを批判し、社会変革の指向性の強い「持続可能性に向けての環境教育」の必要性を主張していた。また、自然学校運動の発端にもなった清

里環境教育フォーラムの動向に対して、林・原子(1999)は「現に起こっている環境問題をどう認識し、どう解決に向けて考えるかということよりも、環境教育を自然の中で展開することそのものの方が、優先されている印象を受ける」と述べ、自然体験活動を中心とした環境教育は「自然が強調されるあまり、環境問題を社会的・経済的および歴史的に意識する傾向は弱い」のではないかと疑問を投げかけていた。また、ジョン・フィエン(2001)も自然の中での体験活動を扱う「環境を通しての教育」の意義を認めつつも、環境問題を生み出す社会構造への批判的意識が弱い点を指摘している。

このように、従来の自然体験活動に対する評価は、環境問題をうみだす社会構造の問題点を学習内容に持ち込むことができず、社会変革という観点から言うと、消極的ないし否定的な役割しか持ちえないというものであった。降旗も、同様の点を指摘していた(降旗 2006 23)。

その一方で、近年では自然学校に対して、前述したような積極的な評価がなされるようになった。この相反する評価の相違は、ひとつには分析の視点の違いが要因となっている。

西村(2013 4)も指摘するように従来の研究は「自然学校の活動内容、および背景を構成する要素」に焦点を当てており、それは「自然学校研究というよりは自然体験活動の研究であった」。そのために、従来の自然体験活動の研究は、分析の範囲を教育実践の枠内にとどめていたといえる。しかし、自然学校研究では、地域社会の相互関係に焦点を当てるようになった。その結果、自然学校が社会に与えるさまざまな影響が明らかになった。これはつまり、次のようなことである。

自然体験学習は、従来から指摘されているように「人—自然関係性においてこれまで主に展開されてきた」(降旗 2006 40)。そのため、環境問題を引き起こす社会構造そのものを学習のテーマにとりあげることはあまりない。しかし自然体験活動を地域で実践する自然学校を研究対象とすることで、社会への影響をとらえることができるようになった。その結果、自然学校が耕作放棄地の利

用や里山の保全といった地域環境の保全、地域経済や定住人口および交流人口の増加といった地域振興、地域産業の創出、災害復興支援といった様々な地域社会の問題の解決に貢献していることが明らかになってきた。また、自然学校に関わる大人たちをエンパワーメントしているという事実も確認されるようになった。その結果、近年では「持続可能な地域づくりの拠点」と言われるようになったのである。

しかしながら、自然学校が地域社会の課題解決に貢献しているとしても、それは改良主義的なもので、冒頭にあげたような環境教育が目指す「根本的な問題解決」とはいえない可能性もある。なぜなら、そもそも自然学校が共通して採用している「自然体験活動」という方法は、社会変革をもたらすようなラディカルなものではないといわれてきたからである。ならば、自然学校がもたらす地域問題の解決も、対処療法的な、改良主義的なものにとどまってしまう可能性も十分にあるのではないだろうか。

そこで、本稿ではヴァンダナ・シヴァの議論を手がかりに、自然学校がラディカルなものなのかどうかを理論的に検討する。ただし、自然学校の実践は全国各地で多様に展開されている。その中には非常にラディカルで先進的な事例もあれば、持続可能な社会とはほど遠い既存の社会構造を再生産するだけの事例もあるだろう。そこで本論では個別の事例ではなく、自然学校が“本質的に”ラディカルさを持つといえるのか、そうでないのかを理論的に明らかにすることに目的を置く。続く3節では、まずヴァンダナ・シヴァの思想を取り上げる意義を述べた後、彼女の思想を整理する。

Ⅲ ヴァンダナ・シヴァの思想とその観点

1 シヴァの思想の概要と注目する理由

本節では、シヴァの主張の概要とそこから明らかになる分析の観点について述べるが、その前にシヴァの議論に注目する理由を以下に述べる。

ヴァンダナ・シヴァは、科学哲学を専門とする女性で、チプロ運動をはじめとするインドの女性

たちと環境運動に関わる実践家でもある。シヴァは、近代的な開発と開発の前提となった近代科学は、西欧の男性が、非西洋・女性・自然を支配する「西欧的家父長制」であると批判する。そして、インドの伝統的な環境観を再評価し、女性と自然の解放を主張する。このような彼女の思想は、エコフェミニズムのひとつであるとされる。

山口(2003)によれば、エコフェミニズムは、「女性性」に対する理解の違いから、いくつかの異なる立場があり、それ自体多様な思想である。しかし、人間による自然支配と男性による女性の支配には重要な関係があるという洞察から、新しい自然と人間の関係および女性と男性の関係を構築しようとするところに共通点があり、ラディカルなエコロジー思想のひとつと評される(山口2003)。

本稿の課題に対してシヴァの思想が示唆に富むのは、「人—自然関係」の抑圧構造が「人—人関係」の抑圧構造と同根にあるという指摘にある。つまりこれまで、環境教育研究では「人—自然関係」、「人—人関係」とわけて論じられてきたが、その結節点についてはほとんど議論されてこなかった。そこに、自然体験活動に内在する社会変革的性格に迫ることが出来なかった要因があるのではないか。

また後述するが、シヴァは現実における女性の復権を主張しつつも、男女の二元論的な性差を批判している。女性とともに男性も重要な役割を果たしている自然学校運動において、ほかのエコフェミニズム⁴⁾ではなくシヴァの思想を取り上げるのはこのような妥当性があるからである。

シヴァは、既存の開発がもつ暴力性は「還元主義としての近代科学」に起因すると考える。そして、「還元主義」の近代科学で捉えた自然観とは異なる「女性原理」としての自然観を対置する。この二つの対置された自然観は、「人—自然関係」のひな形としてとらえることができ、これによって自然学校が構築する「人—自然関係」について分析する視座を得られる。

続く節では、この近代イデオロギーの自然観と女性原理の自然観をシヴァに基づいて整理しながら、自然体験活動や自然学校が持つラディカルさ

を整理する。なお、本稿ではシヴァの論考のうち特に本稿の主題と関連の深い『生きる歓び—イデオロギーとしての近代科学批判』をもとに、その主張の概要について述べる。

2 還元主義としての近代科学批判

シヴァは、利潤の拡大を目指す「負の開発」がエコロジーの危機と生存の危機を引き起こしている、と指摘する(シヴァ 1994)。ここでいう「負の開発」とは、近代科学に導かれた開発を指し、その本質は、生命維持システムである森林と水と土を破壊するものである。

「負の開発」と表現される近代の開発モデルは、植民地の存在を前提としたもので、それゆえに植民地時代が終わった後も、「女たちの搾取や排除、自然の搾取と劣化、他の文化の搾取と崩壊を基礎にしていた」とシヴァは指摘する(シヴァ 1994 16)。これはつまり具体的には次のように説明される。

インドにおいて女性は、生活維持と生存のために自然を管理活用してきた。「彼女たちこそ自然とともに社会を維持する主要な担い手である」(シヴァ 1994 20)。しかし、「負の開発」においては、「利潤と資本を生産しない仕事はすべて生産と無関係か非生産的な仕事とみなされる」(シヴァ 1994 19)。そのため、生命を維持し自然を破壊しない生産が、市場経済のための生産にとって代わられる。女性と自然の搾取、排除、破壊とはこのようなプロセスを端的に表現している。

このような「『開発』と進歩の名のもとで行われているのだが、生存そのものを脅かす進歩の概念にはどこか間違いがあるに違いない」とシヴァは考える(シヴァ 1994 5)。シヴァが「間違い」の根底にあると考える論点をまとめると以下の3点になる。

第1に、今日の科学と開発の「イデオロギー上のルーツは科学革命と産業革命にあり、そのバイアスをなおも保ち続けている」(シヴァ 1994 6)とし、開発の間違いの根源には「科学的知識そのもの」(シヴァ 1994 30)があるとみる。この「科学と開発のバイアス」とは、西欧男性をモデルに

してそれにあわない部分がある女性や自然、西欧以外の文化を、欠落したもの・開発すべきものとして隷属する「西欧的家父長制」のことである。「開発とは、本来全ての人々の福祉の改善を言うが、ニーズ、生産性、成長などの経済概念を西欧化することが開発とされたのである」とシヴァは述べている(シヴァ 1994 16)。これはつまり、非西欧の文化が「未開」とされ、それが西欧化されることが近代化であるという間違った観念に対する端的な批判である。さらにシヴァは、デカルトをはじめとする思想家を挙げながら科学革命と産業革命が「中産階級、ヨーロッパ、男性の企業家を利する特殊なプログラムであった」(シヴァ 1994 31)と分析し、近代科学は言われているほどに普遍的でも価値中立でもない、という。

第2に、この近代科学の基礎には、還元主義がある。還元主義の特徴は「均質性」、すなわち「すべてのシステムは不連続で関連のない原子的な同じ基本要素からなり、全ての基本的プロセスは機械的なものである」(シヴァ 1994 38)。この自然を機械とみる隠喩は「分離可能性と操作可能性を前提」としている(シヴァ 1994 38)。分離可能だからこそ、部分の知識で全体の知識とみなすことができるうえ、その場の状況と関係なく知識を抽象化できるのである(シヴァ 1994 38)。そして、自然に対して操作が可能であるのは、自然を「物」としてみなすからである。

還元主義的な近代科学の認識論において、それ以外の自然に対する認識方法は認められない。しかし、実際には還元主義の自然観だけが唯一の自然観ではない。シヴァが対置するのは「女性原理」としての自然である。

第3に、ヨーロッパの科学革命は自然を「テラマーテル(母なる大地)」から機械と原材料のみなものに変えてしまった。この変質で「自然への冒とくと収奪に対する倫理的、内面的な制約がすべて取り払われ」、「自然に対する人間の優位と支配」という人間と自然の関係が新たに生まれた(シヴァ 1994 6)。これを改善するには、「自然と社会での生命の尊重をうたう女性原理を取り戻すこと」(シヴァ 1994 239)である、というのがシヴァ

の主張である。

3 女性原理としての自然

シヴァが取り戻そうとする「女性原理としての自然」とは何か。シヴァが基礎とする自然観はインド思想に基づくものである。インドの宇宙論では、世界は創造と破壊、結合と分解の弁証法的な作用によって産み出され、再生していくとされている。全ての存在を生み出す動的なエネルギー(シャクティ)を顕示したものが自然(プラクリティ)と呼ばれる。ここで挙げられる二つの要素は相補的であり、二元論的な思考の対極にあると考えられる。

シヴァが整理する女性原理としての自然の特徴は5つある。すなわち、

「女性原理であるプラクリティの特徴は、①創造性、活動性、生産性、②形態と相の多様性、③人を含むすべてのものの結合と相互関係、④人間と自然の連続性⑤自然における生命の尊厳ということだ。」(シヴァ 1994 58)

この5つの特徴と比較することで、還元主義としての近代科学の自然観の特徴がより鮮明になる。

まず、①の創造性、活動性として自然を見るということは、自然が生命を持った存在であるという考えに基づく。一方で、還元主義としての近代科学は、前述のように機械を隠喩とし、自然を「物」、生命のない存在とみなす。また、オーソドックスな近代の価値観では、創造的で生産性を持つのは人間であって自然ではない。生産性を自然の側に置くのは脱近代的な認識と言ってよい^③。

②形態と相の多様性に対して、還元主義の近代

科学では自然を「均質的」「普遍的」なものとして捉えようとする。例えば、デカルトは「物質の本質は延長である」といったが、この定義は極めて普遍的である一方で、自然が持つ色や手触りといったさまざまな質は切り落とされている。このデカルト的定義に象徴的なように、自然の多様性は近代的科学観において見られないというのがシヴァの主張である。

③の「人を含むすべてのものの結合と相互関係」とは、自然の要素が切り離すことが出来ないという考えである。対象的に、還元主義は自然を要素に分解して理解できると考える。

また、④「人間と自然の連続性」に対して還元主義は人間と自然を切り離す二元論の立場に立つ。シヴァは「環境が人間から切り離されて人間の構成要素ではなくなり、人間を取り巻くものになっている」(シヴァ 1994 58)とその特徴を述べているが、還元主義の近代科学における人と自然の「分離」は、認識論的にもそうであるし、存在の在り方としてもそうであったと考えられる。

このような自然観の相違は、開発のあり方にも違いをもたらす。自然をどのように操作をしてもよい「物」とみなす近代的な自然観は、「成長する資本主義の自然収奪の要求にぴったりとそうもの」(シヴァ 1994 32)であり、自然における生命の尊厳などみじんもない。近代の「家父長制的な開発」は、壮大で一極集中的な仕事と富を作り出した。「こうした集中性とそれにとまなう均一化は、生命の多様性と多元性とも抵触せざるを得ない」が、一方で「女性原理にのっとった仕事と富は、まさに安定性と持続性を基礎にしているがゆえに重要なものだ。集中化のない多様性は、自然の仕事と女の生産性のみなもと」であり「女性原理を支えるのは多様性とわかちあいである」(シ

表1 二つの自然観の対比

女性原理としての自然観	還元主義としての近代科学的自然観
①創造性、活動性、生産性	物、無機物、非生産的
②形態と相の多様性	均質的、普遍的
③人を含むすべてのものの結合と相互関係	機械の隠喩(分離可能性・操作可能性)
④人間と自然の連続性	人間と自然の二元論
⑤自然における生命の尊厳	資源であり経済成長のために収奪可能

ヴァ 1994 62-63)。

以上「還元主義の近代科学」に基づく自然観と「女性原理」の自然観の相違を示した(表1)。この相違から、人がどのように自然を認識し、関わるかという自然観が、開発という社会的な問題と結びつくこと、そして、人と自然の関係が人間社会の構造的な問題と結びついている事が示された。

4 サブシステムとそれを担う人間の復権

シヴァはインドの女性たちのエコロジー運動に関わってきた。そして、シヴァの思想はこの実践が基礎になっている。そのため、シヴァは、現実の女性が解放されることと女性原理の復権を重ね合わせて議論する。それは繰り返しになるが、インドにおいて、女性たちが市場経済の外側にあるが人間の生存を支える自然と共にある労働と生産を担ってきたからである。つまり、女性原理としての自然を復権させることは、生存を支え、「サブシステム」⁽⁴⁾としての自然に関わる労働を担う人々の解放、エンパワーメント、復権と一体のものとしてとらえられている。自然と人が解放されるとは、このようなプロセスのことを意味するのである。逆に、自然の搾取や破壊を伴う開発は、自然とともに生きる人々、自然から生きる糧を得る人々を搾取し、抑圧する開発であることを示している。

この主張は、男女の二元論的な「女性」に限定するものではない。なぜなら、シヴァはそもそも男女の二元論的な見方を否定するからだ。シヴァは「女性原理」は、生物学的な意味での女性だけに適応されるものではなく、「自然と男や女の活動性、創造性の原理である」と明言しているからだ(シヴァ 1994 70)。

本稿の課題である自然学校運動に即してこの分析を解釈すると、自然と関わる労働を担う人びとのエンパワーメントとして読み替えることができるだろう。すなわち、自然学校が自然体験活動を通じて、自然とともにある“労働”とその担い手および文化の復権を担うとき、ここでシヴァが主張する「女性原理としての自然の復権」と同じ文

脈にあるものと考えられるだろう。

IV 考察

1 日本の近代開発におけるシヴァの主張の妥当性

以上、シヴァの議論から、近代の科学とそれに基づく開発の特質が明らかになった。もちろん近代批判と言っても様々な観点がありシヴァの主張は近代の一面を捉えたものにすぎない。

しかし、シヴァの主張は従来の「開発」がどのようなイデオロギーに支えられてきたのか、自然をどのようなものとみなしてきたのかを端的に整理していると評価できる。

それは日本における既存の開発問題にも、十分当てはまる観点であろう。例えば、日本における河川開発の思想は、「川から自然が持つ恵みを超えたサービスを引き出そうとし、同時に、川の持つ不都合な側面を完全に封じ切ることを目指した思想であった」(蔵治 2010 47)。いくつもつくられた発電事業用のダムによって、水量がほとんどなくなってしまったり、洪水による水害を防ぐために、大規模な護岸工事やダム開発が続けられたりしてきた。この河川の開発計画は全国一律の基準に基づいていた。そのため、川の地域性は全く考慮されなかった。

この開発を基礎づける河川工学の教科書には、長らく河川の定義が次のようになされてきた。

「河川とは、地表面に落下した雨や雪などの天水が集まり、海や湖などに注ぐ流れの筋(水路)などと、その流水とを含めた総称である」⁽⁵⁾
(大熊 2007 289)

ここには、生き物たちの棲み家としての川、地域の文化を育んできた川、そういった側面が見事に切り落とされている。無機物とみなされ、地域性を無視し、資源として収奪される川の姿がここにはある。

その結果、「川はもはや自然物ではなく、人工の水路として扱われ」「川は人から遠ざけられ、人は川を知らずにサービスだけを受け取るように

なり川の存在自体が忘れられていった」(蔵治 2010 48)。確かにコンクリートの堀の中を流れていて人が気軽に触れ合えることができず、暗渠化され実際に“姿を消した”川も少なくない。そうになると治水・利水を行ってきた地域の文化も消滅してしまう。もちろん平成9年の河川法の改正によって「環境保全」や河川整備に「地域の意見を反映する」仕組みが位置づけられたように、近年では「負の開発」のイデオロギーの反省や見直しもみられる。しかし、人と自然の共生に最も必要な「川と人との豊かなふれあい」の位置づけは不十分で、川に対する「哲学」の根本は十分に転換していないという指摘もある(宇沢・大熊ら 2010 429 - 434)。

以上、シヴァの指摘する「負の開発」が日本においても当てはまることを示すために、河川開発を一例として挙げた。自然を「物」としてコントロールし、「資源」として収奪し、自然と共にある人々の力を奪い取ってきたという、エコロジー危機をもたらした従来の「人—自然関係」の“基本形”を明らかにする視点を、シヴァの主張は与えてくれたと結論できる。

ここから本稿の課題に即してシヴァの示した「還元主義としての近代科学」と「女性原理」としての自然という異なる二つの自然観を参照点に自然学校運動が産み出す「人—自然関係」、および「人—人関係」の両者がどのような質を持っているのか考察する。自然学校が共通して採用している自然体験活動において構築される人と自然との関係は、シヴァのいう「還元主義的近代科学」の延長にあるものなのか、それともそうではないのか。

2 自然体験活動における関係性の考察

自然体験活動は、英語では「experiential learning activity in natural environment」と表記される。自然を対象とするだけでなく、自然の“中”で活動すること、自然にどっぷりと浸るような体験が、自然体験活動の特質である。このように自然と人間を分離するのではなく、自然の中へと人をいざなう自然体験活動は、自然を遠ざ

けてきた近代的開発と対照的であるといえる。この点は、前節において、還元主義の近代科学と女性原理としての自然観を比較したが、その特徴の④で確認した。

ここで自然体験活動において、人は自然を利用することから、自然体験活動は「人間中心主義」であり、近代的な開発主義と同根であるという反論もあるかもしれない。しかし、人間が生存のために自然を利用することすべてを「人間中心主義」として「自然中心主義」と対立させ前者を否定するのは、ほとんど現実的ではない批判であろう。鬼頭(1996)は「人間VS自然の単純な二分法に立った議論だけでは、非西洋社会、特に第三世界や先住民を含めた形での環境倫理を構築することは不可能であろう」と述べ、人間と自然を対立させる二分法が西洋近代の産物であったことを指摘していた。そのうえで、鬼頭は人と自然の関係性の在り方を問う分析枠組みを提起し、議論されるべきは、自然の利用や保全を含めた人と自然のかかわりの在り方であることを理論的に示した。

この点を踏まえつつ考察すると、自然学校運動には「自然はともだち」「自然は先生」という表現がみられる^⑥ことから、自然を「物」や「資源」とみなし支配し収奪しようとする近代イデオロギーとは異なっていると結論することが出来る。

さらに、自然体験活動のリスク管理の方法も特徴的である。前述の河川管理の例に見るように近代的な開発の思想では、自然が持つリスクに対して、自然を変えることで危険を回避しようとしてきた。逆に、自然学校では指導者や参加者が危険に対処できる「スキル」を身につけることで事故を回避しようとする。この危険性に対するアプローチは対照的である。

自然体験活動は、科学的なアプローチ、すなわち自然を分割化し断片化して理解しようという関わりとは異なる。身体を通じて自然と関わるという関わりは包括的なものである。自然体験を説明する際に多用される「感じる」という言葉が示唆的である。自然体験活動では、言語以外の、言語を超えたところで自然を理解する。そのために自

然と丸ごと関わる。視覚、聴覚、触角、嗅覚、その他の全ての感覚を通じて自然を認識する。これは、自然を断片化して理解しようとする方法とは対照的である。

自然学校は、全国各地で多様な展開をみせている。その土地ならではのプログラムを作り上げている団体も多い。西村（2013 92）は、自然学校の発展過程においてフィールドや参加者に即した独自のプログラム開発がみられたことを明らかにしている。いまでは、このような地域色が各自然学校の魅力にもなっているといえるだろう。これは何より、自然学校において実施される自然体験活動が、地域の自然の多様性を基盤とし、それを生かしている事の表れにほかならない。

また農山村の自然学校では、一次産業など自然に関わる生業や伝統的な自然に関わる文化を学習活動に積極的に取り入れている事例が増えてきた。それらの多くは、手で田植えをしたり、畑を耕したり、山菜を取ったり、磯辺で魚を捕まえたりする。それらは、現代の機械的な一次産業を体験し理解するというよりは「サブシステム」としての活動に近い。さらに、農山村の自然学校の中にはその土地の人々を指導者と迎え入れる試みがみられる。このような自然体験活動は、自然が「生産性」を持っていることを端的に理解させる。加えて、自然と関わる生業を担ってきた地元の人々を指導者として迎え入れることで、その経験や知恵に光を当て、その人々を直接的にエンパワーメントしている⁷⁾。

ゆえに、自然体験活動の自然観はシヴァのいう「女性原理」の自然観と必ずしもすべて一致するわけではないが、同じように近代主義的な自然観の対抗となりうる特徴を持つ。すなわち、①仲間や友達という表現に象徴的なように自然を客体として支配するのではなく、自然を人間にとって不可欠なものとし友好的な関係を築く、②自然を改変するのではなく、人間が知恵や技術を身につけることでリスクや不便さを解消しようとする、③「感じる」という表現に象徴的なように、身体を通じて包括的に自然と関わる、④自然の多様性を尊重する。加えて農山漁村における生業と

かかわる自然体験活動の場合は、生きた自然の生産性とサブシステムの復権、自然と共にある労働の担い手をエンパワーメントするという意義も見いだせる。

これまで、自然体験活動は社会構造の変革に対して、消極的な役割しか持ちえないと評されてきた。しかし、人間による自然の支配と抑圧こそ、シヴァによれば近代的な「負の開発」を生む根底的な社会構造にほかならない。これまでほとんど理論的に整理されてこなかったが、自然体験活動は近代的な「人—自然関係」とは異なる「人—自然関係」を基盤に持っている。よって、人と自然の関係を新たに構築し、自然体験活動の場を作ろうという自然学校の実践は、社会に対してラディカルな変革の取り組みとなるのである。

またⅢ-3ですでに述べたが、シヴァが批判する「負の開発」は、「壮大で一極集中的な仕事と富」を作り出すが、「女性原理にのっとった仕事と富」は、「多様性とわかちあい」をもたらす。自然学校の経済性はどちらに近いであろうか。

西村（2013）が明らかにしたように、自然学校はその運営を支える「スキル」を共有し高め合ってきた一方で、その活動を支える「マインド」、すなわち活動を担う人々の社会や活動への“思い”や活動内容は、多様性に富んでいる。これは、成功のための汎用性が高い「スキル」を分かち合っていること、同時に、地域の自然の多様性に合わせて活動そのものが多様であること、さらに人々の信念や「マインド」の多様性も保持されていることを示している。自然学校運動はひとつの実践共同体でありながらも、そこには「多様性と分かち合い」を見いだすことができる。

以上、自然体験活動および自然学校が基礎とする自然観および自然と人間との関係は、近代科学的自然観に対してラディカルな要素を持っている事が確認できた。それゆえに、自然体験活動が産み出す自然と人間の関係は近代的自然観とは根底的に異なるというラディカルな深さを持っている。さらに、そのような自然体験活動の場を作ろうという試みは、社会に対してラディカルなインパクトを与える。ゆえに、自然学校のラディカル

さとは、自然体験活動が持つ人と自然の関係の脱近代的性格になると結論できる。また自然学校が与える農山村の人々へのエンパワーメント、自然学校運動の「多様性と分かち合い」のラディカルな側面も明らかになった。

3 ラディカルさについて

自然体験活動や自然学校がラディカルだ、という違和感をおぼえる人もいるかもしれない。自然体験活動の推進が政策的にすすめられるようになって久しい。自然学校において行政の民間委託や市場化が進んでいる点を危惧する論者もいる(降旗 2006 35-36)。根底的に社会を変えるような運動が、市場や政治と蜜月のような関係を持つはずがない。ゆえに、自然学校がラディカルであるとはいえないのではないか。

この疑問に対しては、次のラディカルさについての論述が手がかりになる。井上(2013)は、「原生自然保護」や「資源保全」といった考え方も提唱された当初は「とんでもない」ものだとして「受け流されていたであろう」、と述べた後、次のように続ける。

最初に唱えられたときには、その当時の社会情勢や主流をなす価値観から見て、まったくの問題外、「お話にならない」とされる主張や提案、あるいは「現実を踏まえない理想論」に過ぎないとされるアイディアは少なくない。しかし、「保存」思想や「保全」思想の事例にみられるように、時代が進むにつれて、それが時代に沿った有効な提案として社会に広く受け入れられていくということもけっして少なくない。(井上 2013 18)

現在、評価の高い自然学校の実践記録を読むと、立ち上げた当初は十分「おかしい人々」とみなされていたことが分かる。しかし、「社会的認知」(西村 2013 7)をすすめる自然学校運動の結果、「常識外れでとんでもない」ものから、「あり得る選択肢」へ変わっていったのである。

それは、自然学校を作ろうという運動が「開か

れた性格」を持っていた事も大きい。開かれた性格とは「固定された特定の教義に縛られた閉鎖的な性格を持つものではあってはならないということである」(井上 2013)。西村(2013)が指摘するように、自然学校は自然体験活動を共通のツールとする以外は多様な思想に基づき、多様な方法でその活動を展開している。井上(2013)は、ラディカルなオルタナティブにとって不可欠な「開かれた性格」の前提には「多様性や相互の尊重といった要素」があると述べているが、自然学校運動⁸⁾はこの条件を満たしていた。

同時にラディカルさには「深さ」が必要であると井上はいう(井上 2013)。ここでいう「深さ」とは主流の社会の構造や価値観に対する批判的な認識と根底からの変革を目指すことを意味する。自然学校運動のラディカルな「深さ」は、3節および4節で述べてきたように、自然体験活動が基礎に持つ、近代的開発とは異なる「人—自然関係」に起因するといえる。自然学校運動は構造的な社会変革のための「広がり」と「深さ」というラディカルさを理論的に持っているといえる。

V おわりに

以上、本稿では自然学校が理論的にラディカルなものであるという結論を得た。

従来環境教育論においては、自然体験学習はその学習内容に、社会構造や政治的な課題を取り上げにくいことから、社会変革に果たす役割は消極的であるという見解が主であった。しかし本稿での議論を経て、従来の評価とは逆の結論を得た。すなわち、自然学校が社会変革に貢献しうるのは、自然学校が共通に用いている自然体験活動に本質的なラディカルさがあるからである。本稿ではそのことを理論的に明らかにした。

当然、社会を変える方法は自然体験活動だけではない。また、個別の自然学校実践がどの程度ラディカルで社会変革の影響を持つのかは、本稿の課題の範囲を超えているので今後の研究課題として残される。

ただし、本論ではこの課題に関する実践の手がかりを与えたと思われる。すなわち、危惧される

ような自然学校の市場化・事業化が進むのなら、それは自然体験活動を単なるカネやヒトを集めるための手法としか考えていない事業者があるからだ。自然学校の実践が新自由主義を結果的に下支えしてしまう「改良主義」になってしまうのか、「根本的な社会変革」の実践になるかの分岐点のひとつは、自然学校の実践者が自然体験活動の持つラディカルな「深さ」を反省的に自覚しているのか否かにあるといえるだろう。この点について、自然学校運動が持ちうる「ラディカルな深さ」を本論では明らかにしたといえる。

また、実際に行われている自然体験活動には、近代的な自然観がある程度影響を与えている。たとえば近代登山のように自然を征服する近代的自然観が強くみられる野外活動もある。人間と自然を対置させる二元論的な考え方を残した自然観察は、それは近代的な側面を持つともいえる。パッケージドプログラムには自然の多様性への配慮という点が乏しく、自然の均質性や知の普遍性を前提とした近代的自然観が紛れているとも考えられる。

このように、実際の自然体験活動には近代的要素と近代批判の要素が紛れ込んでいる。個別の実践事例研究において、この点は詳細に検討されるべき課題であろう。

注

- (1) 文部科学省では「青少年の野外教育の充実」(1996)において自然体験活動を「自然の中で自然を活用して行われる各種活動」と定義している。日本環境教育フォーラムは、2010年度の全国自然学校調査をふまえ「自然体験活動とは、野外で自然とのかかわる体験的な教育活動全般をさす」と定義している(阿部ら2012 218)。本稿では、自然学校の実態により即している後者の定義を採用する。また「体験的な教育活動」には計画的な活動のみならず、「森のようちえん」のような偶発的な学びの契機を主体とする活動も含むものとする。なお、類似の語句である自然体験学習とは「自然体験活動を通じた学習」のことを意味する。
- (2) 例えば、神秘主義的かつ自然主義的に女性性をとらえ男性性に対立させるスピリチュアルエコフェミニズムやカルチュラル・エコフェミニズムなどもある。
- (3) 女性原理の自然と類似しているが、ギリシャ哲学における<自然>は、万物を生み出す力であった。これに対して、ヘーゲルおよびマルクスは、生産するものは「自然ではなく、活動する精神ないし労働する人間である」とした(レーヴィット 1975 126)。生み出す力を持つものが、自然ではなく人間の側にあると考えるようになったのは近代であった。詳しくは、以下を参照。K.レーヴィット『世界と世界史』, 柴田治三郎訳, 岩波書店, 東京, pp209および、K.レーヴィット, 1975, 『ヘーゲルとヘーゲル左派』, 麻生建訳, 未来社, 東京, pp175
- (4) 「サブシステム」は、基本的生存や自律的生存と訳され、産業化された社会における労働と対置される概念である。シヴァの文脈では、最低水準の生存という消極的な意味にとどまらず、人々の生存と社会を支える基盤を含むものとして理解したい。シヴァは、『アースデモクラシー』(2007)において「sustenance」(「生命持続」と訳出されている)の語を用いている。語義はサブシステムと類似しているが、持続可能性のニュアンスを付加した用語であると考えられる。本稿ではこのようなシヴァの主張をくみ取りながらより一般的な「サブシステム」の語を採用した。
- (5) なお、大熊はこの定義に対して1992年頃から次の定義を学生に教えている。「川とは、地球における物質循環の重要な担い手であるとともに、人にとって身近な自然で、恵と災害という矛盾のなかに、ゆっくりと時間をかけて、地域文化を育んできた存在である。」
- (6) 自然学校運動における一つの大きなネットワークである、「清里環境教育フォーラム(現在は、日本環境教育フォーラム)」の報告書

のタイトルは「自然が先生」「自然が友だち」「自然が兄弟」「自然は家族」であった。(西村 2013 51)

- (7) グリーンウッド自然体験教育センターによる地域の人々の変化がその典型である。詳しくは、以下を参照のこと。辻英之, 2011, 『奇跡の村の物語—1000 人の子供が限界集落を救う』, 農文協, 東京, pp268。ほかにも類似の事例として、「くりこま高原自然学校」や「大杉谷自然学校」「TAPPO 南魚沼やまとくらしの学校」などがある。
- (8) 本稿における「自然学校運動」とは、複数の自然学校による、自然学校の社会的役割と認知を広げようとする社会的活動を意味する。

引用文献

- 阿部治, 2012, 「序章 なぜ環境教育を学ぶのか」, 日本環境教育学会編, 『環境教育』, 教育出版, 東京, 213pp
- 阿部治・川島直編, 2012, 『ESD 拠点としての自然学校—持続可能な社会づくりに果たす自然学校の役割—』, みくに出版, 東京, 311pp
- 降旗信一, 2006, 「序章 自然体験学習とは何か」, 朝岡幸彦・降旗信一編, 『自然体験学習論—豊かな自然体験学習と子どもの未来』, pp266
- ジョン・フィエン, 2001, 『環境のための教育—批判的カリキュラム理論と環境教育』, 石川聡子ほか訳, 東信堂, 東京, pp213
- 林浩二・原子栄一郎, 1999, 「市民による環境教育—そこにおける反省の意味」, 鬼頭秀一編, 『環境の豊かさを求めて—理念と運動—』, 昭和堂, 京都, 258-288
- 井上有一, 2013, 「ディープエコロジー運動の現在—環境思想のラディカルさとは何かを考える」, 『環境思想・教育研究』, 6, 18-25
- 鬼頭秀一 1996, 『自然保護を問い直す—環境倫理とネットワーク』, 筑摩書房, 東京, 254pp
- 蔵治光一郎, 2010, 「20 世紀の河川思想を振り返る」, 宇沢弘文・大熊孝編, 2010, 『社会的共通資本としての川』, 東京大学出版会, 東京, 436pp
- 西村仁志, 2013, 『ソーシャルイノベーションとしての自然学校—成立と発展のダイナミズム—』, みくに出版, 東京, 176pp
- 新田和弘, 2003, 「持続可能な社会を作る環境教育」, 『別冊開発教育 持続可能な開発のための学び』, 開発教育協会, 22-30
- 大熊孝, 2007, 『増補 洪水と治水の河川史—水害の制圧から受容へ—』, 平凡社, 東京, 309pp
- ヴァンダナ・シヴァ, 1994, 『生きる歓び—イデオロギーとしての近代科学批判—』, 熊崎実訳, 築地書館, 東京, pp268. (Vandana Shiva: Staying Alive - Women, Ecology, and Survival in India, 1988)
- 山口裕司, 2003, 「エコフェミニズムの論点とその可能性—C. マーチャントを手がかりに—」, 『宮崎公立大学人文学部紀要』, 10-1, 303-316